

平成30年度 千葉県総体サッカーの部 総評

平成30年6月9日（土）から、10日（日）、16日（土）、17日（日）、の日程で千葉県高校総体サッカーの部決勝トーナメントが行われた。先に行われた一次トーナメントの結果を踏まえ、16チームが全国総体千葉県代表の2枠をかけてトーナメント方式で試合を行った。大会の運営は、多くの方々のご協力を得て進められている。応援マナー、レフェリーへのリスペクト等が向上していくことを期待する。

流通経済大柏、習志野、日体大柏、市立船橋がベスト4に進出し、準決勝、決勝が千葉県立柏の葉公園総合競技場にて行われ、準優勝が市立船橋、優勝が市立習志野という形で平成30年度千葉県総体の幕が閉じた。両チームは8月7日（火）から行われる東海総体2018サッカーの部に出場する。

大会全体を通じて、各チームどう守備をするのかに着目できるものであった。3バックにして守備時は中盤の選手をDFラインまで下げ5バックにして守備をするチーム、中盤の人数を増やして数的優位を作ろうとするチーム、リトリートして守備するチーム等、各チームの意図が見える試合が多かった。いずれにしてもロングボールへの対応とセカンドボールの攻防が重要な要素になり、ヘディング、球際の強さ、切り替えの速さやプレーの連続性がゲームの流れを左右した。また、ボールを奪った際にスピードを持って相手ゴールへ迫るカウンター攻撃が多く見られた。スピードに乗った中でのプレー精度や、疲労した中で前線のスペースへスプリントしていく能力が必要不可欠であった。

その中で、今大会で際立ったのはGKの活躍である。身長の高いGKが起用されることが多い中、習志野の西村、日体大柏の倉田はGKの中では高身長とは言えない。しかし、DFラインの背後のスペースのリスク管理や前線へのフィード、シュートストップなど高いスキルを発揮し、チームの勝利に大きく貢献した。彼らのトレーニングと経験によって身につけられた技術や判断力は、身長あまり高くないGKにとっての可能性を示してくれるものであった。

また、守備が組織化されゴール前にスペースがない状況に対して、ゴール前へボールを進める手立てとしてクロスボールが多く見られた。その精度とプレッシャーが厳しい中でもゴールを奪えるストライカーの育成が今後の課題であろう。

チームとしての守備を徹底し、粘り強い戦いを見せた習志野の優勝は今大会を象徴するものであった。来年度より全国大会への出場枠が1枠となる。全国大会の決勝で千葉県代表同士が戦う可能性のある今年度、習志野と市立船橋が全国大会の決勝で戦うことを期待し総評とさせていただきます。